
Angel knight

蒼野祐樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Angel knight

【Nコード】

N4314A

【作者名】

蒼野祐樹

【あらすじ】

念願だった高校教師になった秋野守^{あきのまもる}。ある日、守が10年前の中学生の時の夢を見た。其れから守の人生が大きく動いていく

第零話

学校帰りに見た空。

純白の翼を美しく羽ばたかせた天使が黒い翼の少年を抱えながら飛んでいた。

自分のような普通の人間が見えるはずの無い光景。

それよりも存在さえも疑わしい光景。

神は何故、自分にこのような光景を見せたのでしょうか？

何故、自分だけ…コレはアナタの気紛れですか？？

夢だと思い目を擦る、でもその光景が現実だという証拠が残されていた。

純白の羽と漆黒の羽

其れから……

宙に浮き怪しく輝きを放つ紅い石が目の前に……

神は自分に何を求めているのだろうか

これはアナタの気紛れなのですか??

何故、自分に見せたのですか??

最後に一つ

アナタは人間を恨んでいるのですか??

第一話

日曜日の朝、

目の前には真っ白な天井と下には少し硬いベッドの布団が感じられた。

いつもどおりに目が覚めて深く深呼吸をする。

体はいつもより汗ばんでいて気持ち悪い。

「またかよ…コレで5度目だ…」

中学生の時の夢を見た。

今でも自分の記憶を疑うように俺自身は、あの光景を信じていない。其れでも手元に残った証拠品を大切に保管している、矛盾な自分。

「10年経ったっていうのに…しつこい夢だ」

頭を抱えながら悩んでいる男性、

彼が高校教師の秋野守今年で24歳。あきのまてる

生徒の見本とならなければならなかったため髪は普通に黒く眼も黒い、いわゆる双黒。

「眠い……えつと8時か……」

デジタル時計を覗き込みながら呟くと傍に置いておいた携帯が無音で光っているのに気付いた。

誰からだ？と思いながら画面を見てみると…

【大川光】
おおかわひかる

「光から？…しかも電話だし…」

渋々といった感じに通話ボタンを押す。

『さツツさと出て来おい！！！』

携帯から零れるくらいの大声に守は驚き慌てて耳を塞ぐ。
其れでも電話の向こうから光の声が聞こえてくる。

嫌々だったが守は電話を耳に向けてから一言、

「何処に??」

『外に決まってるだろおがぁ！！』

「あつそ…ってか、五月蠅いから静かにしてくれないか??」
『して欲しかったら約束ぐらい守れ！！』

約束??

えつと…約束って………あ！！

「車を貸すって約束だっけ??」

『そうだよ！！俺が野球部の副顧問だから車が必要だって昨日言っただろ?!』

「今思い出した」

守が欠伸をしながら答えると光が更に苛立ち始めた。

其れに気付いた守はベッドから立ち上がり着替えていく。

「今から外に行くから…待ち合わせって何処だっけ??」

『それも忘れたのかよ…お前ン家の近くにある噴水広場の駐車場だろ?』

「あ…そうだった」

玄関に向かっていき車の鍵をジープンのポケットにしまう。

外に出てから少し邪魔な前髪をかきあげる仕草をする、それを見ていたのか若い女性が見惚れていた。

自分を見ていると気付いた守は女性に微笑みかけてから

「お早う御座います」

「お、お早う御座います!」

その様子が可愛く思えたのかニッコリと微笑んでから手を振り、そのままエレベーターに向かっていく。

なんたって、ここは9階なんですから。

「さっさと行かないと光に怒鳴られる」

いや…もう怒鳴られてたけどさ…気にせず!

其れから地下に向かい光との待ち合わせ場所に向かっていった。

第二話

其れから10分程度、車を走らせると光との待ち合わせ場所の駐車場についた。

守が車から降りると真っ先に目にしたのが怒りに満ち溢れた笑みを浮べる光だった。

「よ、よお…遅れてゴメン」

「本当だ、罰として今度何かを奢れ」

「何時も何かと奢らせていただいているんですが…まあイイヤ、其れで宜しく」

光は俺の幼馴染兼親友で高校時代まで一緒に馬鹿をやっていた仲だ。何故か3年の時に夢、というか将来やりたいことが一致した。

だからお互いに頑張ろうと誓い合い相棒のように別れを惜しみ別々の学校で教師を目指した。

その結果、別れて今年の新任教师での初めての学校が偶然にも同じ学校だったのだ。

それから野球部の顧問である石塚拓海がユニフォームを着て上にジャージを羽織って二人の前に現れた。

「秋野先生!!」

「あ、石塚先生」

「遅いですよ、生徒達が待ちくたびれてしまいましたよ」

「すみません、ちょっと昨晚にはずせない用事で遅くまで起きてた

ものでして…」

「はッ、どうだか」

「おいおい、親友を疑うのか??俺はこんなにも光のことを信頼して大切な大切な…数千万もする車を貸すんだぜ?」

ワザとらしく大声でいうと野球部の生徒兼選手が集まってきた。

どうやら高い車が珍しいらしい、可愛いものだ。でも、傷をつけられちゃ堪らない。

「ほらほら、さっきのは嘘だから離れろ」

「えゝ嘘なのかよ、秋野先生の嘘吐き」

「五月蠅い、貸してもらっただけ有りがたく思え」

そついつてから野球部のマネージャーである女生徒を呼び荷物をつませた。

準備が整えられると光が守へと近づいてくる。

「んじゃ、8時までには連絡して返すから起きとけよな」

「いくら眠いからって、んな早くになんか寝たりしねえよ」

「そつか…ところで守…最近疲れているのか??」

「はあ?…んな訳ねえだろ、ほら生徒達が待つてるぜ…試合、勝つてこいよな」

光に伝えると守は何も言わずに何も聞かずに自宅マンションへと向かって行った。

第三話

其れから自分の部屋に戻り残り時間72時間という期間でテストを作成し始めた。

一年生の問題だからいたって簡単、ウチの高校は公立でレベルも別に高いっていうわけでもなく極一般的な普通の高校。

滑り込みである程度の知識さえあれば入れるとウチの高校は有名だったため生徒数が異常なまでに多いのだ。

今は少人数で授業をする学校が多いらしく、生徒の保護者がウチ（高校）でも少人数にして欲しいと言われたのだ…だったら…

だったら子供を他の学校に入学させるよ。

と思いながらそばで聞いていたのを思い出して一人微かな笑みを浮べる。

ふと窓際を見ていると一枚の羽が落ちていた。

「…黒い羽…？」

拾い上げ近くで見てみる、すると何故か頭の中が真っ白になった。そして思い浮かぶのは学生時代に見てしまった忌々しい光景。

空を必死に飛んでいく二人の翼を持つものと、それを追いかけるものの。

何でこの光景が頭の中に…？

俺は一体どうすればイイのだ…？

そして閉ざしていた記憶から抱えられていた黒い翼の少年の瞳思い出す。

幼い頃は俺にも自傷癖と似たような癖の持ち主で瞳を見ただけでコイツが自分と同類だと分かった。

俺は何とか今は隠しながら暮らしている、学校にも袖まである服しか着ないようになっているし今のところ知っているのは親友のアイツだけ。

知っていても俺に普通に慕ってくれるから俺は離れずにすんだ、まさかライバルと宣言され今まで競ってきたのだから。

思い出に流されていたら何時の間にか目の前には一枚の羽のみになっっていた。

それにしても黒い羽なんて…カラスなんか近くに出るなんて聞いたことも居ないし…。

つてか、カラスにしては羽が綺麗だ。

まるで…昔、俺が拾った羽のように綺麗だった。

「まさか…あの時の…??」

でも、アレ以来そいつ等の姿なんて一度も見えていない。

「まさか…な…」

そう思う……いや、無理矢理そう思って忘れようとした。
そして部屋の奥へと進んで行く。

そして、今日の一日が終わった。

第四話

翌朝、予想外にスツキリと目覚めていた

昨日見つけた羽はまだ外に放っておいたままだったのを思い出し窓を勢い良く開ける。

それと同時に風に吹かれて乱れていた寝癖だらけの髪が余計に乱れてしまう。

「早朝からこれかよ……にしてもキツイ風だったな」

独り言のように呟き落ちている羽に手を伸ばす。

守が羽に触れた瞬間、嫌な感じに襲われた。

……何かがくる……？

ふツと思い見える限り周りを見わたしてキョロキョロとする。
だが全く何も見えないし、何かが来る様子も見えない。

「気のせい……か……？」

9階から見渡す光景に少しばかり目を奪われるがすぐ我に戻って窓を閉じる。

だが、先程の事が気になってしまっ守

あんな事これまで生きてきて初めての事だった。

何かに恐れて何かに怯えて体を震わせて冷や汗が流れ落ちるなんて…

いや……初めてなんかじゃない…。

「そうだ、この感覚……あの時と同じだ」

あの時だ…この目で天使を見たときと同じ感覚。

恐怖で体の震えが止まらなくて男のくせに泣きそうになって。
今思い出しただけでも体が震えだす。

俺から【普通】という言葉が消し去った俺の中の大事件

誰も知らない俺だけが知っている出来事

天使というものが怖くなった瞬間

悪魔というものを愛しく思えた日

天使なんて見掛け倒しだと思えた。

神様、俺は愚かなのでしょうか？

第四話（後書き）

次の話は守の過去についての話です。

第五話

コレは…中学生の頃の俺の記憶。

ようやく一年生から進学して体に馴染んだ学ランを身に纏って勉強のためにと下校中だった。
いつもの通りに見慣れた通学路を通って帰っていると…

…コッソ

頭の上に何かが落ちてきた。
何だと?と思いつながら髪を触っていると転がるように何かまた落ちてきた。

「…石？あ、でも真っ赤だ」

真っ赤で綺麗な色の石だった、知識の豊富でなかった頃の自分は寶石が何かと思つてその石を太陽に透かして見てみる事にしたのだ。

でも…それが俺の人生を狂わせる引き金だった

人生と言う螺旋階段から足を滑らせ落ちていく瞬間

石に透かせて見えたの眩しく輝く太陽ではなく真っ白で純白の翼を羽ばたかせた天使

その天使に抱えられた真っ黒で漆黒の翼をした少年

その少年と目が合った、合っただけで逸らす事が出来たのに出来なかった。

其れは、その少年の眼が希望が消え悲しみに溺れて全てのものから拒絶や否定され続けてきた者の成れの果ての眼。

何故分かるだつて？…そういう友人が居たからだ。

そいつは自殺しつまつたんだ…で、さっきの少年の眼も死人のように光を失つた眼だつてわかつたんだ。

見惚れてしまう様な眼なのに…勿体無い

でも幻覚だと思つて目を擦ってから、次は肉眼で見てみた。

石を透かして見ているわけでもないのに…見えている。

見えた天使はまるで大昔の騎士が被っていた鎧を身に纏つた天使が6人、太陽の正面で止まっていた。

視力は良い方だが流石に何を話していると言う事しか分からない。

天使の3人が先程目の前を通り過ぎてった2人を追うように羽ばたいていく。
俺は、この天使達の美しさに目を奪われた、でも同時に恐怖さえも感じた。
残った3人は周りを見渡していた…こんな距離だ、どうせ気付かないだろう。

こんな考えが甘かった。

「…えッ？」

1人の天使と目が合ってしまったのだ。

ヤバイ、他にの2人も連れて降りてくる!!!

そう思い咄嗟に持っていた石を隠すことにした、でも逃げる事は出来ない。

「ッ?!」

「貴様…我々が見えるのか？」

首を横に振りたかった、でも天使の視線から感じられる威圧に動くことが出来ない。

恐怖で涙が浮かび上がってきて、ついに腰を抜かしてしまった。

「見えるのか…ならば仕方が無い」

そう言つて天使は腰にさげていた剣を抜いた。
高く掲げられた剣はまるで月のように銀白に輝いていて太陽と重な
つて更に輝きを増していた。

「この世に存在せぬ者を見る事が出来る人間は異端者、その者はや
がてこの世に災いを齎し平和を乱すだろう、我等天使は貴様を平和
の破壊者とみなし敵として始末する」

しまつ・・・？

「え………？」

それって…殺すってこと？

「消えろ、異端者」

俺を？

何でさ…なんで？

俺が何したっていうんだよ…

ただ天使が見えたってだけで…なんで消されなくちゃだめなんだよ
!!

死にたくない

死にたくない

死にたくない

生きて、生きて自分の人生を飽きるまで楽しんで進んでいくんだ

死にたくない…生きるんだ

「死んで…たまるかッ」

震えていた自分が言った言葉

すると天使と俺の間に光が出てきたお互いの視界を遮られた。

いきなりの事で咄嗟に眼を庇い腕で光を遮るが、守には特に眩しく感じられなかった。

でも天使達は光のせいでまともに眼が開けない。

「これは…?」

手を伸ばすと2枚の羽が握られていた。

「何…この羽…」

疑問に思っているのと石を入れていたポケットが光っていた。
石を取り出してみるとまるで羽と共鳴するように真っ赤な光が強ま
っていく。

「き、貴様！！人間の分際で何故【王の宝】を持っている？！」
「知るかよ、んなの俺が…俺が聞きてえんだよ！！！」

そう大声あげると頭の中で声が聞こえた。

『生きていますか？』

とても優しい声だった。

心地よくて気を抜いたら眠ってしまいそうになる。
まるで聖母マリアのような人の声だ…。

『生きていますか？』

「……生きたい、生きて生き延びたい」
『聞き届けました』

そう言って声が聞こえなくなった。

「う、うわああああああ！！！！」

聞こえなくなつたと同時に聞こえてきた叫び声。

誰のものかと思いきや目の前にいる天使の1人が叫んでいたのだ。
だが守が見たものは天使の手が砂のようにさあーっと消えていく光景。

正直見たくないモノだった、だから目を逸らしたら…またもう1人の天使の足が砂になって消え始めていた。

「ガイロツ！ハレツ！」

2人の名前を叫びと真正面に居る天使の顔が歪んだ。

「な、何だ？！何なんだ？！」

「こ、この石のおかげ…？」

守の手にする石の光が徐々に弱まっていく。

「あ…消えていく…」

ゆつくりと石の光が消えていった、そして消えると同時に天使達も砂となって消えていっていた。

一体何なのだろうか…、考えても考えても訳が分からなくなっていく。
取り合えず、目の前に何もなくなると力が抜けて地面に座り込んだままになっていた。

神様、この石は俺にとって命の恩人であり不幸の元凶です。

第五話（後書き）

次は現代の戻ります。

第六話

久々の夢

目覚めの悪い夢

後味が悪くて脂汗が額ににじみ出てくる

傍に置いてあつてフェイスタオルで拭っても拭っても止む事がない

「どうして…こう何度も夢に…」

この事件以来、俺には今まで見えていなかったものが見えるようになった。

一般的に「幽霊」というものも見えるようになり、でも見て見ぬフリ。

下手に関わるとろくな事が無い。

過去に成仏したいから、と言われて手伝っていたのだが…危うく憑かれてしまうところだったのだ。

まあ、この件に関しては俺の精神力が勝ち追い出す事が出来た、でも普通はあり得ない話だと聞かされる。

きつと肌身離さず持っていた紅い石と2枚の羽のお陰だろう。

それから「天使」も見えるようになった。

俺を目撃した天使達はあの時に消えていったからあれ以来狙われて

いない。

でも、なるべく空で舞い飛んでいる天使には注意して行動している。
目を合わせないように、見つからないように、逃げるように。

どうして…俺だけ？

普通、気味が悪くて誰にも言えない話。
なのに俺は唯一頼りになる親に今までのことを相談するために全て
話してしまったのだ。

とうぜん、親は気味が悪くなる

父は自分を突き飛ばす、母は刃物を構える

俺は？

俺は…天使を消す事が出来た石と羽だけ

天使にきくなら人間にも効くだろう、と甘い考えが頭をかする

嗚呼

神様

酷すぎます

俺が何をしたって言うんですか？

アナタが気まぐれに見せたせいで俺は親に殺されそうになってるんですよ？

責任持って助けてくださいよ…

俺を助けてください、まだ死にたくありません

神様ツツツ！！！！！！

「まだ覚えてる…あの時の感触を…」

両手を見詰て過去に浸る。

思い出すたびにリアルになっていく思い出。

俺はあの時…自分の親を消したんだ

天使達と同じ様に石の声が聞こえたから「生きたい！」って答えた
ら消えていて…

俺1人が部屋で立ち尽くしていて、静かに沈黙がただよった。

部屋中探し回った、でも親の姿が無い。

外に出てみると車も残っていた。

出かけたのではない、俺が消した。

『俺が

両親を

消したんだ』

其れからは決めた、1人で生きていくと……

何かあれば隣のオバサンを頼ればいい。

困った事があれば他人に頼らず自分で解決する。

そして、その結果がコレ。

1人暮らしのお蔭で家事全般は人並みに出来るようになって手先が器用になった。

一番重要なのは「金」、でも心配は要らなかった。

どうやら本人達が消えても口座はのこっていたのだ。

2人とも分かりやすい暗証番号で助かったよ。

でも、俺はもう大人…なるべく使わずに置いてある。

「さあつて、生徒たちのテストでも作るか！」

妙にヤル気が出て自分の授業用のノートを捲りながら適当にテスト問題を書き上げていき仕上げるにPCで形を作って出来上がり。

コピーは…金かかるし学校のコピー機借りるか。

「明日にでもコピーしてテストに備えましょう…！」

辛気臭いのは嫌いだ、しかもたった一人で。

つて事で、明日は学校だし寝ます…！！

「アイツが……マモル、だったのか……」

夜な夜な、1人の男の声は守の耳に入ることなく朝を迎えた。

第七話

『生きたいですか？』

時々聞こえてくる女性の声
あれは誰なのだろうか？

少年だった俺の心は声の事でいっぱいだった。
勉強もろくに頭に入らず成績も悪かったのを覚えている。

よく、こんな自分が教師になれたなあとつくづく思う
光もそれに同意見らしく出会ったときに笑いあった。

年を重ねていくうちに声の主の疑問は薄れていって結局忘れてしま
っていたのだ。
今こうして再び疑問に思うなんて……少し笑ってしまったが…

2度と思い出したくなんてなかった

このまま記憶も消してもらえばよかった、両親だけでなく幼い記憶
を全て。

そうすれば、思い出すことはない。
自分で消した両親だって「存在」というものが全て無くなっていた。
近所のオバサンたちは俺を何処の子供なのだろうか？と良く噂して
いたのを耳にした事がある。

その噂を聞く度に自分が消した両親の顔や手の感覚が蘇ってくる。何度も水で手を洗った、何度も何度も……でも感覚が消えてくれない。でも思い出す両親の顔は全て笑顔だった、それだけが唯一の救いだった。

朝を迎える

カーテンの隙間から漏れてくる日光の輝きが守の頬を照らす。輝きが伸びていき光は徐々に守るの顔全体を照らして朝を告げる。眠っていた守だったが日光の光が眩しくなつて渋々とゆっくり瞳を開けていく。

一番最初に目の前に映つたのは見慣れた天井、其れから自分を目覚めさせた日光の輝き。

「ん……考え事しすぎた、寝不足……だ……眠たい……」

唸り声を上げながら背伸びをすると欠伸も出てくる。

欠伸をすれば目尻に涙が浮かび上がってきて流れ落ちていく。

昔はよくコレを使って悪さをしたものだ、子供は泣けば誰もが戸惑う。

まあ、それでも無い輩もいたが殆どの大人は引つかかって親切にしてくれた。

気前のイイ大人は食べ物とかお金をくれたりもした。

惨めなフリをするっていうのは気が引けたのだが幼い俺にはこの手しかなかったのだ。

ま、そんなことはどうでもイイ。

守は手近にあった目覚ましに手を伸ばし時刻を見て

「えっと、6時30分か…学校まで徒歩で30分、車をとばせば10分もかからない…今日は職員会議は無い、校内に9時までに入ればOKだから…まだ眠れる」

独り言を長々と呟けば目覚ましの時刻設定を8時30分に設定して再び布団の中へと潜っていった。

眠りにつくまで時間はかからない、本当に眠たい時は人間10分もあれば眠りにつける（俺だけか？）

悩んでいても仕方が無い、俺は今出来る事を、しなくてはならない事をしよう。

たとえそれが学生のためのテスト作りだとしても！！！！

其れから約2時間後、見事に目覚ましは鳴り響き守を起こした。

鬱陶しそくに目覚ましを見れば時間ぴったりで余計に苛立ってしまった。

自分で設定した時間帯に目覚ましに起こされて腹が立つ、なんて馬鹿馬鹿しいのだろうか。

そんな事を1人で思っていると刻一刻と時間は進んでいく。

学校に遅れる訳には行かず、布団から体を起こしてラフな格好に着替えて洗面所へと向かっていく。

蛇口を捻り出てきた水を両手ですくい顔を濡らせる。

朝はやっぱりこうしないと目が覚めない、サボった時はダルくて眠くて敵わなかった。

生徒にも色々と指摘され散々な目にあつた…だからコレだけは欠かせない。

そして軽く朝食をとってから外に出て車に向かった。

「忘れ物も無いし…よし、OKだな」

其れからエンジンをかけて自分なりの安全運転をして学校に向かつていった。

本日の通勤時間は7分、今まで10分という大きな壁をこえられなかったのだが今日は調子がイイ！

「せんせー！！」

駐車場に車を停めて職員玄関へと向かっていると遅刻寸前の男子生徒から挨拶される。

コイツ【篠崎哉宵^{しのざき さいよ}】は入学当時から俺に良く懐いていて友達のような存在。

まあ光には負けるが黒髪黒眼が印象強くて容姿もそこそ良いし、頭だつて良い。

「おつはよお！先生今日も車で通勤？」

「ああ、今日は眠くて眠くて仕方が無くてさ…だから、つい今回のテストは手抜きに……」

「ええ？！其れホント？！」

話しかけてきた生徒は嬉しそうに目を輝かせながら俺の話を聞く。でも、俺はそんなに甘くない…手抜きなんかしたら上にしかられちまう。

「……機嫌悪くて手抜きにしかかったんだ、ホント生徒に悪い事しちゃったなあって」

「うわぁ…先生ってば性格悪ッ！生徒の期待を裏切りやがって!!」
「期待する方が間違ってるだろ、ってかお前頭良いんだから別にイイじゃねえか」

「でも守先生のテストは難しいから嫌いなんだよ!!」

「難しい？嬉しいこと言ってくれるじゃねえか、徹夜した甲斐があったぜ」

「授業の時は優しくて分かりやすいのに…テストになったら厳しくて難しくなってるさ……」

「一応教師だからな、テストの時だけは心を鬼にしてやってんだ、ありがたく思いやがれ」

「思いたくもないし思わせないで!!」

そう言って走って玄関の靴箱へと向かって行った。

勢い良く走っていたから途中で転んだりしねえかなあと思いながら後姿を見送っていると、

「いで!!」

転んだ。

足を滑らせ顔面から床に激突する。

何故コイツは何時も俺の期待を裏切らない良い子なのだろう、と笑ってしまった。

鼻を打ったらしく涙目になって起き上がると俺の笑い声が聞こえたのだろう、後ろを振り返り。

「先生の馬鹿ッ!!!!」

「次は転ぶなよお」

そう言つて俺も背を向けた。
まだ後では哉宵が怒鳴っていたが気にせず職員室に向かつていく。
小さく笑いながら自分の机に行き荷物を下ろす。

「今日も篠崎君と戯れていたのですか？」

「犬山先生、お早う御座います」

「お早う御座います、で…今日はどんな話題で苛めたのですか？」

「苛めた、だなんて人聞きの悪い…ただ遊んだだけですよ」

この女性は犬山瑠璃先生、美術の担任。

ついでに言つと俺は国語だぜ

優しくて丁寧に教えてくれる犬山先生は全校生徒の憧れ。

見た目は25前後くらいセミロングで無駄に露出していない、媚も売っていないから余計に男子生徒の目も女子生徒の目も惹き付けるのだろう。

慕われていて人気者、去年のバレンタインに女生徒からも貰ったと噂があるほどだ。

俺もこんな女性が好きで憧れ、最初は目をつけていたんだが…彼女は結婚して子供も居る。

そんな人に手を出すほど俺は落ちぶれていない!!!

でも、俺と性格が合うらしく少し腹黒い。

「なるほど…テストの難易についてですか…」

「手抜きなんて誰も作るわけ無いのに、でも引つかかってくれるんですよ」

「じゃあ私も今日授業がありますから遊んでみます」

「イイツすね！結果報告は放課後をお願いします、俺も授業がありますからお互いに語り合いましょうー!!」

きっと周りは俺たちを見てこっもおもっただろう…

「「「「「哀れな生徒だ」「」「」「」

それから、すぐに放課後を迎えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4314a/>

Angel knight

2011年1月28日08時47分発行